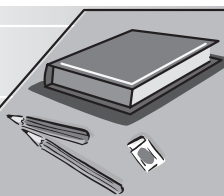


学生時代と図書館 111

「図書館における不思議な体験」

竹下 ルッジェリ・アンナ



初めて大きな図書館に入ったのは、16歳の時でした。その時は、高校生でしたが、大学生の友達と一緒に自分の出身の町であるパレルモ（イタリア、シチリア州）の国立大学（伊：Università degli Studi di Palermo）に勉強しに行き、同大学の図書館に入り、初めてその魅力を感じました。当時は、自由に入ることができていました。実は、イタリアでは教育が皆の権利であることは昔から大切にされた概念です。そのために、多くの他の国より教育費はかなり安かったのです。少なくとも私が学生であった頃までの話です。

パレルモ大学の図書館の話に戻しますが、あの時に『ハリー・ポッター』の映画のワンシーンのように、私の目の前に多数の本から音楽に導かれるかのようにダンスしながら文字が飛んでいました。単なる私の想像から生じたイメージでしたが、「本の力」を強く感じた瞬間でした。一生、忘れることができない、とても印象的な体験でした。

パレルモ大学との縁は長く続きませんでした。日本語を勉強するために、故郷である南イタリアから北イタリアのヴェネツィア市に引っ越しました。Ca' Foscariと呼ばれているヴェネツィア国立大学に入学してから、新たな夢が始まりました。大学の建物はルネサンス時代の宮殿で、教室も図書館も500年以上を感じさせる驚くほどの場所でした。

ある日、本を読んでいた際に人の声が聞こえました。話が禁じられている図書館の中で珍しいことだったので、声の方向を振り向いたところ、信じられない光景を目にしました。パンツしか着ていなかった若い男がテーブルの上に乗っていて、大きな声で「今日、卒業しました」と言っていました。その後、男は、恥ずかしさで目を伏せながら、テーブルから降りて、図書室から出ていました。その時、「なるほど」と思いました。イタリアで大学に入るのは簡単です

が、卒業は非常に難しいからです。そして、卒業の日はまだ卒業していない学生や友達に罰を命じられるという伝統があります。図書館のテーブルの上に乗っていた男はその罰を受けていた人でした。卒業でき、あまりの喜びで、友達に言われあんなに恥ずかしいことをすぐ行動に移したのです。しかし、こういうことは、図書館が学生の生活の中に大きな役割を果たしていたということでもあります。

次に図書館に関わる不思議な思い出は、非常勤講師になったばかりの時でした。その時、京都のある大学で「宗教学概論」という科目の担当になり、大学の図書館で授業の準備をしていました。資料をさがしたり、集めた本を読んだり、コピーをしたりして、大忙しでした。ある日、午前中から図書館に入り、作業していたところ、いつの間にか夕方になりっていました。窓を見た瞬間に、なぜ外は暗いのかと考えながら、大変驚いたのですが、同時に大きな喜びを感じました。長い間、時間の流れにまったく気が付かずに作業しながら図書室にいたわけでありました。今日、このような意識状態は、「フロー」（英：flow）*と呼ばれています。この概念はハンガリー出身のアメリカのポジティブ心理学者ミハイ・チクセントミハイ（Mihaly Csikszentmihalyi）のもので、当時、私は知りませんでしたが、「幸せの源」であるということは、常識になっています。

今、自分の人生を振り返ると、図書館という不思議な場所は、様々な体験できる空間だと強く思っています。

*「フロー」について、ミハイ・チクセントミハイ『フロー体験—喜びの現象学—』（1996）、『フロー体験とグッドビジネス—仕事と生きがい』（2008）、などを参照。

たけした るっじぇり あんな（教授）